

水産防疫対策委託事業（リスク評価のための基礎調査）（令和元年度／国庫委託）

－アユの冷水病の発生状況の把握及び対策の検討－

酒井忠幸・武田維倫

要 約

冷水病の発生を防ぐためには防疫が最も重要である。しかし、河川において防疫を徹底することは難しい。そこで、冷水病の被害を軽減できる手法の開発を目指し、以下の調査を実施した。

冷水病発生状況調査 今年度データを収集した 10 漁場（図 1）及び昨年度までに収集した 23 漁場、計 33

表 1 冷水病の発生状況（令和元年）

漁協名	漁場	放流日	解禁日	発症	
				日付	水温
那珂川北部	黒羽	4/8	6/1	5/20	18.0
	箒川	4/16	6/1	5/10	19.5
鬼怒川	上河内	4/16	5/26	6/13	17.1
	石井	4/21	5/26	6/7	18.0
	田川	5/13	6/15	6/26	19.1
渡良瀬	渡良瀬	5/10	6/9	6/12	16.9
黒川	板荷	4/4	6/8	6/15	15.7
	小来川	4/10	6/8	7/1	15.3
西大芦	大芦川	5/8	6/15	6/26	15.8
塩原	箒川	5/11	6/30	6/5	14.5

漁場について解析した。解禁日から発生までの日数と解禁日の水温の関係を見ると、水温が低い漁場ほど発症までの日数が長い傾向が見られたが、統計的に有意ではなく、今後のデータの積み増しが必要と考えられた。

冷水病に強い種苗の放流効果に関する調査 感染試験において比較的生存率の高かった C 系統¹⁾のアユ種苗を黒川（日光市小来川地区）に放流したところ、解禁日の釣れ具合は従来の放流種苗系統と同等で、冷水病による減耗は比較的少なかった。

追加放流の効果に関する調査 鬼怒川（上河内地区）において成魚サイズのアユを放流したところ、調査期間中の釣り人 1 人 1 日あたりの釣果のうち平均 28.8% を追加放流魚が占め、昨年度（27.2%）と同程度の結果だった。一方、月ごとに追加放流魚の割合を見ると、7 月は 37.9% だったのに対し、8 月は 4.5% に減少した。今年度は漁場での冷水病発生中に追加放流を行ったため、7 月末に追加放流魚でも冷水病が発生した。このことから、追加放流は漁場での冷水病の終息後に行うことが望ましいと考えられた。

早期解禁した漁場の事例調査 解禁日を従来から 1

週間前倒しした鬼怒川漁協において冷水病の発生状況を調査した。5 月 26 日の解禁日に、釣り人 102 人に対して聞き取り調査を行ったところ、冷水病の症状を持つアユの釣獲は確認されず、同病の発生は確認されなかった。

なお、本課題の詳細については「令和元年度（平成 31 年度）水産防疫対策委託事業（水産動物疾病のリスク評価、天然水域における疾病の清浄性確認のための調査）報告書」において農林水産省へ報告した。

参考文献

- 1) 武田維倫・小堀功男・石原学・吉田豊・西村友宏。2020. 生産コスト低減のための魚病被害軽減技術の確立－冷水病に対するアユの系統別抗病性検証試験－. 栃木県水産試験場研究報告, 63:12-13.

（指導環境室）